

エヴェリーナ 雑観

石 本 キ

フランシス・バーニー(Frances Burney, 1752-1840)或いは彼女をよく知っている人々にはもつと親しみの持てるフアニー・バーニー(Fanny)そして後のダルブレイ夫人(Mme. D'Arblay)が処女作「エヴェリーナ」(Evelina)を発表したのは千七百七十八年の一月末でその時彼女は満廿五才と六ヶ月であつた。

「エヴェリーナ」には「うら若き女性の出世物語」(A Young Lady's Entrance into the World)といふサブタイトルがあり、又著者が之に附した序文には

“To draw characters from nature, though not from life, and to mark the manners of the times, is the attempted plan of the following letters. For this purpose, a young female educated in the most secluded retirement, makes at the age of seventeen, her first appearance upon the great and busy stage of life.”

(實在の人物をその儘書くという訳ではないが、とに角、人物を描写することゝ、当時の風俗を示す事がこの書簡体小説の目的である。この目的のために僻陬の地で教育を受けた一人

の若い婦人が十七才の年に初めて非常に多忙な人生の舞台に登場するのである。」

と言つてゐるのによつても、十七才で世間にお目見得するのはエヴェリーナであるのは明白であるのに、この作によつて作者が一躍有名になつた事実から之をフアニー十七才の時の作であるとし種々伝説的な要素を加味した噂が長寿を享けたダルブレイ夫人の存命中既に伝えられていたらしく、更にこの著者に好意を持たないらしいクォーター・レビュー・デュウ誌上で一批評家はダルブレイ夫人は父バーニー博士の「追憶録」をものするに当り「エヴェリーナ」出版の年代を記するのを避けたのか、隠したのか胡麻化しているのは實際の年よりも八才も若い時に書いたものとして若さの故に一層この作品に価値を持たせようがための企みであると明らかにさまに悪意ある見方を示している。突然頭角を現わした人を必ず一度はこつぴどくやつつけるのが容赦のない批評家達のことであり、如何に多くの作家を悩まし又鞭撻した事であろう。フアニー・バーニーはグラフトン氏(Mr. Grafton)という偽名を使つてこの書を出したので、父バーニー博士さえそれを娘の作品と

はつゆ知らず一本を家に持帰りファニーに一読を勧めたという逸話もあるが、之をダルブレイ夫人自身が否定したという事をスコット(Sir Walter Scott)は云つてゐる。尤も「エヴェリーナ」が発刊されるといふ事を父にさへ秘していたということから想像され得る話である。あれほど忠実に十五才以後の日記を事細かにつけてゐる彼女がどこにも「エヴェリーナ」著作の年を十七才と書いていない。之が出版された年の三月の記事に

“I have not pretended to shew the world what actually is, but what it appears to a girl of seventeen—and so far as that, surely any girl of seventeen may safely do!”

(私は世の中が實際どんなものであるかを示そうとしているのではない。十七才の少女にどう見えるかを書いてゐる。そして見えるまゝの世の中で十七を越した娘のしても差支えないことを書いてゐる。)

とある。之によつても作者がエヴェリーナに成り代つて書いてゐるに過ぎないことが明らかである。

ファニーが六人兄弟の中でも一番仲良くしていた妹のスザンナ(Susanna)は十三才の時に三つ年上のファニーを評して

“The characteristics of Fanny seem to be sense, sensibility, bashfulness, and even a degree of prudery.”
「ファニー姉様の特徴は分別があり敏感で羞かしがりやで少しお上品振ることです。」

と云つたということはファニーの伝を書く総ての人の繰返す言葉である。この最後の言葉“*A Degree of Prudery*”(慎ましやかさ)をタイトルとして現代の英国女流作家エミリー・ハーン(Emily Hahn)はファニー・バーニーの半生を描いてゐる。この伝記の中のファニーは幼児時代は知的発達が稍遅れていたが、少女時代には母親からは充分な才気を認められていて、語学、文学の好きな祖母や実母の指導を受けたゞけで何らの学校教育は受けなかつた。姉と妹とは母の死後巴里に遊学させられたがファニーはあまり内気な性質なので寄宿舎の生活に不適當と考えられ到底その機会を得なかつた。ファニーの慕つてゐた祖母と父バーニーの雑多な蔵書とが幼いファニーの知的探求を満すものゝ凡てであつた。八才の時に母を亡くし、六年を経、第二の母を持つようになつたが、この母エリザベス・バーニー夫人も又子供等の文学教育には一家言を持つていて、既に文学少女の傾向を示していたファニーの濫作を手厳しく戒めたので到頭ファニーは書き溜めていた紙を一抱えごつそり中庭に持出して焚書しなければならなかつた。この事実をファニーの最後の小説“*The Wanderer*”の序文の中に自ら物語つてゐる。「姉の創作の愛好者であつた妹のスザンナは泣きながら炎が紙を舐め尽すのをぢつと見て居た」と。ハーンやオースティン・ドブスンが云ふようにこれがファニーの十五才の誕生日の出来事であるとすれば、感傷的に成り易いティーンエイジの少女にとつて之程傷ましい惨いことがあり得ようか。ファニーの日記の編纂者は彼女の父が再婚したのは十六才の年であると云つてゐる。原稿を焼いて了つたのは継母に叱られた

ゝめであるから、十五才の年とかその誕生日というのは当にならない。十六才以後といふ方が確実性がある。兎に角こうして焼いて了つたものゝ中に彼女の本当の意味での処女作とも云うべき「The History of Caroline Evelynne」（キャロライン物語）の全篇があつたと作者自ら告げている。之によつても彼女は十六才以前から筋のある物語を書いていた事が判る。つまり「エヴェリーナ」以前に彼女の未発表の小説があつた。そして「エヴェリーナ」はその未発表の小説「キャロライン物語」の子供、即ちエヴェリーナといふ娘はキャロラインの唯一人の忘れ形見であつた。「エヴェリーナ」の読者は先づ開巻第一の数通の手紙によつて女主人公エヴェリーナの素性について聞かせられる。

一英国紳士が若気の過ちである居酒屋の給仕女に生ませたのが美貌のキャロライン・エヴェリンで、彼女がサー・ジョン・ベルモント（Sir John Belmont）との秘密の結婚によつて生んだのがエヴェリーナ・アンヴィル（Evelina Anville）である。恐らく作者の心の中では「エヴェリーナ」は「キャロライン物語」の続篇といふ氣持であろう。口惜しくも創作の原稿をすべて焼き払つて了つて以来この作者の心の中で「エヴェリーナ」の創作は始められそして続けられていたのである。或いは部分的には書き留められていたかも知れないから、前出の「エヴェリーナ」著作十七才説を全面的に虚偽であると否定するにも当らないようである。作品を著作年令と睨み合せて価値づけることは年令が若い場合には甘やかした観方を取るのを免れないが、それは今こゝに筆者が企てた事ではないし、この事に関して自由に参照し得る資料を持つ

ている人に委せよう。

作者の取り上げる二人の女主人公、母と娘は共に美人で又共に父親の祝福を受ける事の出来ない薄幸な娘であつた。キャロラインは破鏡の悲歎に死に、エヴェリーナは貴族の典型的な青年に見染められ、又一方貴族の父に邂逅して実子として認められ、青年との結婚も無理なく幸福に運ぶ。前篇が悲劇ならば続篇は喜劇で、目出度目出度の結びになつてゐる道徳的な風俗劇である。一音楽教師の娘ファニーは兼ねて父の交際仲間であつた当時の文壇の大御所ジョンソン博士をはじめ画家のレンルズ、劇作家のシェリダン、バーク、ギボン等々からこの作について激賞を受け、当時の社交界の花形であつたスラール夫人（Mrs. Thrale）の庇護を得て彼女自身も社交界の有名人となり、遂には宮廷と親しいデイラニー夫人（Mrs. Diany）の推挙によりシャーロット女王（Queen Charlotte）附きの衣裳係（Dresser）或いは衣裳保管官という厳めしい官位を与えられるに到つた。之も後の作「セシリヤ」（Cecilia）やキャミラ（Camilla）の作者であつたからではなく「エヴェリーナ」によつてかちえた名声によつてであつた。宮廷に在つての五年間の奉仕は社会的出世と見えるかも知れないが、ウィンザー宮、キューの離宮、いづれの宮殿に於ての生活も作家としてのあらゆる自由を奪われていたし、先輩の³一独乙婦人の圧迫から逃れる事が出来なかつた為許りでなく、王妃の衣裳係りとしての仕事そのものに誠意を以て奉仕はしたが、「Toilette」は「ette」なしの綴を用うべきだと云つたファニーにとつてはどうしても興味の持てる仕事ではなかつたからその間の生

活は非常に惨めなものであつた。

さて、十八世紀の英国小説の華やかな成長は大体この世紀の中頃までに終り、リチャードスンやフィールディングやこの兩人の後を受けたゴールドスミスが各々特異な作を発表した後は聊か冬眠状態であつた。そこへグラフトン氏作として「エヴェリーナ」がひそやかに出現したのは將に春の息吹きのものであつた。勿論ジョンソン博士のラッセラス (Rasselas, 1759) や怪奇小説の鼻祖ウォルポール (Walpole) などがあり、又ファニーの日記によれば「エヴェリーナ」の出版二、三ヶ月前にブルック夫人 (Mrs. Frances Brook) の小説 "Excursion" 「旅」が出ていたが、兎角歴史を飾るような作品はこゝ暫く見られなかつた。そこへ二流所の出版者ロウンデス氏 (Lowndes) が僅か廿磅で買上げた「エヴェリーナ」を冒険的に刊行した。

ファニーにとつては長い間の反芻の結実であつた。エヴェリーナに先立つ事七年、千七百七十一年に発表されたスモーレットのハンプリー・クリンカー (Humpty Clinker) に倣つたかのように「エヴェリーナ」は書簡体の形式をとつてゐる。これはファニーが十五才の時から絶えず日記の習慣をもつていて、それも対象を心に定めてつける事を好んで居たので、日記として可成り報告的、説明的な、或いは説得的な記事が多い。十代には "To a certain Miss Nobody" (ある友へ) とか仲好しの妹スザンナに宛てゝ、或ひは「クリスプのお父様 (Daddy Crisp) と彼女が呼び親しんでいた父バーニーの友人であり、彼女にとつては親友

であり又師としての存在であつた老紳士に向つて、更に後には夫のドラブレーに宛てゝ自分の思想、感情、経験を頌つてゐる。ファニーの日記は普通一般に日記の要素をなしている反省的、回想的、記録的な要素よりもむしろ書簡的な性格に豊からざる魅力がある。即ち書簡体の小説という形式は彼女が長年に亘る日記の経験と「クリスプの父様」と文通した経験とによるものであるが特に又クリスプ氏が「最愛のファニーちゃん」 (The Dearest Fannikin) に時宜を得た忠告⁽⁴⁾を与えているのによる所が多いと思はれる。即

"If once you set about framing studied letters, that are to be correct, nicely grammatical, and run in smooth periods, I shall mind them no otherwise than as newspapers of intelligence.... There is no fault in an epistolary correspondence like stiffness and study. Dash whatever comes uppermost; the sudden sallies of imagination, clap'd down on paper, just as they arise, are worth folios.... Never think of being correct when you write to me."

(間違の無いような、文法的にもきちんと適つたよく注意のとゞいた文章で手紙をあなたが書くときまるでニュースを提供してくれる新聞としか思えませんよ。硬くなつたり苦心して書くような手紙は禁物です。先づ何事にまれ心に浮んだ事を書きつけなさい。忽然と起る空想を起るがまゝに紙に叩きつなさい。それこそ立派な本です。私に向つて書く時には正しく書くなんていう事は考えないで欲しいものだよ。)

とのクリスプ氏の言葉は自分の好みを述べているように見えていても実はファニーの文章の善さ悪さを知つての上での激励である彼女の文の善さは彫琢の美ではなく素朴な言葉で観察したまゝを物語る時に最もよく現わされている。「エヴェリーナ」は五人の人物の間に取交した八十四通の手紙によつて完結されている。その内訳は左の通りである。

エヴェリーナからヴィラーズ先生に。

51

ヴィラーズからエヴェリーナに。

10

エヴェリーナからミルヴァン嬢に。

10

ヴィラーズからレイディ・ハワードに。

5

レイディ・ハワードからヴィラーズに。

5

レイディ・ハワードからサー・ジョン・ベルモントに。

2

サー・ジョン・ベルモントからレイディ・ハワードに

1

八十四通の内五十一通という大部分を占めているエヴェリーナからヴィラーズ先生宛の手紙というのが、作者がクリスプ氏に宛てた手紙や日記の気分と略々共通したものである事が想像出来る。ファニーはクリスプ氏を精神的な父として親しんでいたが、エヴェリーナはヴィラーズ氏を父として慕い、又實際養育上の父とも云ふべき後見人であり、すべて胸の中のありたけを告白する事の出来る唯一人の相手であつた。作者が「エヴェリーナ」に於て最も自分に適した形式を選んで美事成功を納めた秘決はこの辺りにあつたのであろう。

先づこの小説の背景となつてゐる「キャロライン物語」の要素を「エヴェリーナ」の発端の数頁によつて想像して見ると、美人

の女主人公、女蕩しの男爵、非合法的な結婚、結婚証明書破棄等々サー・チャールズ・グランディソン (Sir Charles Grandison) やクラリサ・ハロー (Clarissa Harlowe) 等の悪漢小説 (Picaresque novel) のようなものであつたらしい。幼いファニーの構想したこの筋と「エヴェリーナ」の筋とを比較すると作者の社会や自我の意識の発達を見る事ができる。「キャロライン物語」のヒロインの遺児を美しく清らかに仕立てゝ母側の貴族的な縁者と、下品で教養のない祖母や祖母の親類の之又下層階級の一人の人々との間に板挟みとなりつゝ、自己に目醒め進むべき道を追求するエヴェリーナは母キャロラインに比較すると聊か複雑な意志的發展をとげる女性である。「キャロライン物語」は十五才の誕生日か或ひは十六才のある日に行はれたボンファイヤから万一無事であつたとしても多分永遠にファニーの筐底に秘められる運命にあつたことゝ想像される。ティーンエイチャーの悪漢小説が大人の読者の手に汗を握らせ得るであろうか。控え目勝ちな少女の作として想像すれば恐らく「エヴェリーナ」に見られる性格的な相克とが社会階級の価値観等は見られたかどうか極めて疑はしい。之等はファニーの成長と共にロンドンの芸術家仲間で認められるようになった父バーニー博士がだん／＼広い交際範囲を持つようになり、その客間は常に社会の上層に在つた著名な人々で賑はつていた。ファニーはそのような場合にその中に立ち混るといふ風では無かつたらしいが、人間を観察する機会がより多く与えられた訳である。エミリー・ハーンの云うようにエヴェリーナは慎ましきといふ点に於ては將にファニー自身の表現であ

る。より行動的な能動的な今日の小説の中の女性に慣れた読者にとつてはエヴェリーナは悟りの鈍い間抜け女で、情熱に缺けているために簡単な筋を必要以上に引き延しているような感じを受けるのは尤な事である。ハズリットは品のない田舎娘ならば即座に結婚の申込に応じるであらうが、ダルブレイ夫人は品のよさの極端な例として、理由もないのに小説の最後に到るまで承諾の返事を長退かす事が肝心な礼儀であると心得ていると非難し、「家が炎に包まれても階段を駆け降りたり、足場が倒れかゝつていても舗道から一步でも出る事は全く無作法な事だと思つてゐる」ような女を描いてゐると云つてゐる。このような観方をすれば人物は薄弱な動機によつて行動し矛盾を取てなすように見えるかも知れないが作者はハズリットとは全然別の立場からエヴェリーナの慎重さと階級意識とを批瀝してゐる。エヴェリーナを玉の輿に乗せず、オルヴァル卿の方では平民の娘と婚して身を墮すことも辞せない熱意を見せては居たが、遂にエヴェリーナが父親のベルモン卿と邂逅し、父の財産相姪人と認められ求婚者と同等の資格に於いて目的を達してゐる。ハズリットは情熱を求めているのであるが、著者の狙いは別にあり、“To draw characters from nature” “人物を写生する”といふ意図にむかつてゐるので内気なヒロインを内気なように描いてゐる。

この小説には実にヴァライエテに富んだ多くの人物が極めて対照的に配合されてロンドン³の盛り場やブリストルの保養地に集つては散り又相よる有様をハズリットの云う「男性より先天的に敏感に人の特徴を掴むことの巧みな女性」、しかも若々しい十七才

の田舎出の娘の好奇の眼をとほしての觀察を中心にして書いてゐる。人目を惹かずには置かない程に美しいエヴェリーナがロンドンに姿を現わすと忽ち数名の男性が彼女に目をつけて各自手管を弄して彼女を我ものにしようとする。甚だしいのは観劇の帰途見送るといふながら自分の馬車で遠方まで連れて行たり、又は黒闇の中に拉致したりするが、危機には必らずチャールズ・グランディソンの再来とも云ふべき典型的紳士オルヴァル卿がどこからともなく現れてエヴェリーナを窮地から救つてくれる。手錬手管の巧い伊達男ウィロビー卿、粗野で愚鈍なメルトン卿等の貴族が居り、平民側では身分のよい人の真似許りし度がる自惚男のラヴェル、エヴェリーナの縁続きになるブランドンの銀細工屋の食堂に間借りしてゐる軽薄才士のスミス、彼はブランドンの娘等からは“Quite one of the quality and dresses as fine, and goes to balls and dances, and everything quite in taste—and besides keeps a foot-boy of his own, too” “おるべ名門のお方のように、身扮も立派だし、舞踏会にいらしたり、それに万事好みがお上品なのよ。その上給仕まで置いていらつしやるの。”と感心されていゝ氣になつてゐるが、エヴェリーナには彼の慇懃さは馬鹿氣でいて、磊落さもとつてつけの感じにしか見えない。ミルヴァン大尉は七年振に帰国上陸した水兵で、思ひきり暴れまわつてエヴェリーナの祖母マダム・ドヴァールをあくどい程にからかつてゐる。エヴェリーナも之には聊か愛想が尽きると見えて、

“Notwithstanding the attempts I so frequently make of writing some of the conversation I can only give you a faint idea of his language; for almost every other word he utters, is accompanied by an oath; which, I am sure, would be as unpleasant for you to read, as for me to write. And, besides, he makes use of a thousand sea-terms, which are to me quite unintelligible.”

(幾度か大尉のお話になつた事を書こうとしますが、あの方の御言葉遣いをはつきりお伝え出来ません。何故と申しますとあの方は一言置きに必ず呪つたり畜生呼ばわりなさるので、それを書くのも不愉快ですし、先生がお読みになるのもお嫌いでせうと思います。それから大尉は航海用語をよくお使いになるので私には何の事やら薩張り通じません。)

と云つてゐるが、作者の兄は英国海軍で相当名を成したからフアンもその方の知識はあつたらしい。ミルヴァン大尉の悪戯は痛快ではあるが聞き訳がない少年みたいで不愉快を通り越し破廉恥で、この作家にしては異色の創作である。

ミルヴァン大尉の矛先を真正面に受けるマダム・ドヴァールはマダム・フレンチと綽名をつけられる程フランスかぶれで、事毎に英国風を貶す所は何と云つても居酒屋の給仕女であつた昔は争えない。二言目には「まあ本當に。」“Ma foi!”と叫び、無茶苦茶な英語で “Ma foi, if this isn't one of the most impudentest things ever I see!” 等とシェクスピア風の最大級の形容詞を常用し喜劇的效果を巧く出してゐる。女性の人物描写

はド・ヴァール夫人とエヴェリーナの他にはあまり色彩の鮮明なものはない。プリストルに於てエヴェリーナの保護者をつとめるセルウィン夫人は、どこにでも見られる世話好きの中年婦人である。オルヴァル卿の妹ルイザ・ラーベントは兄とうつてかわつて氷のように冷やかで、エヴェリーナの優さしさ温さとは対照的であるが、この人の出現は小説の終りに近い所でしかも突然であり、以前エヴェリーナの求婚者であつたメルトン卿と結婚させる事は如何にも話の大団円を急ぐの感がある。

これらの人物がロンドンで出会い、共にケンジントン公園に遊び、今日はもうその跡もないラネラー (Ranelagh) の円形音楽堂で眩しい照明を浴びつゝオーケストラの演奏に耳を傾け、夢見心持で夜明けまで歓を尽すといふエヴェリーナにとつて初めての経験を “Terrible reverse of the order of nature! Sleep with the sun, and wake with the moon.” 「陽の照るとき眠り、月出て醒めるとは、自然の掟へのすごい反逆。」と評している。この場所へウィロビー卿やマダム・ド・ヴァール等と来たとき、マダムは英国の婦人が夜の晴の場所で帽子を被つてゐるのを見て驚くので、ウィロビー卿は「僕は御婦人の帽子の擁護者なんかではないですよ。御婦人方がこんな人ぢらしの流行を考案して採用してゐるのを残念に思つてゐるんです。何故つて美人が被れば折角の別嬪が隠れて了うし、美人でない人が被れば見る人に無駄な好奇心を抱かせるだけなんですよ。きつとそも／＼は若い移り気な男泣かせが被つたんだらうと思ふんだがなあ。」と云うのに対して、「帽子はきつと雀斑づらの婆が若い男に追つかけて

貰ひ度いためばかりに發明したのではないかな。」とミルヴァン大尉は答えた。マダム・フレンチは「パリではどんな女だつて同じように取扱われるんだから、そんな苦勞をする必要はないんですよ」と暗に自分が英國では正當に遇されない不満を洩している。「なんだと、この婆さん、パリでは年寄りも若いのも差別しないと云い度いんだな。」とミルヴァン大尉は必ず竹篋返しを忘れない。

其の他ヴォクスホール(Vauxhall)の淨水公園や又其処にある画廊を見物する記事、パンテオン(Pantheon)劇場で度々オペラを見た報告、プリストルの保養地で鉱水を飲用する場所(the pump-room)の様子等は当時の風俗の活きた絵である。作者の目的とした“to mark the manners of the time”その時代の風習を示す事も同時代の称讃を博した程充分にその目的を達してゐる。

ハズリットの指摘するように確かにフアニー・バーニの人物描写は「エヴェリーナ」のみならずその後の作品に於ても極めて外面的な描写に終始して、決して心理的な描写を試みたり哲學的な思想を人物に持たせたりはしない。エヴェリーナは上品であり慎重深くある事が美しく魅力的であり、且それが最も大切な処世上のモットーと心掛けているだけである。ヘンリー・デュームズのある小説⁽⁶⁾の中で社交界を牛耳っている一貴婦人が云っている事を思出す。「どうにもならない程下品であるのが悪いかどうかといふ事は哲學者にとつては一つの問題であるが、とに角人から嫌れるというだけでも悪いのですよ。」「whether or no being

hopelessly vulgar is being bad is a question for the meta-physicians. They are bad enough to dislike, at any rate; ……」と云つてゐるのと同じにエヴェリーナも嫌われるから、みつともないから俗っぽく下品であり度くない。どういう状態が上品であるかというのは別として上品なのは好ましく、典雅な魅力であるからそうあり度いといふ氣持は十八世紀末のみならず今もなほ社交界を支配している極めて常識的で且実用的な念願である。理づめで行けば上品さの反対は必ずしも下品さではなく、上品でなく且下品でもない場合もあり、下品でなく又上品でない場合もあり得る。更に上品であるように装ふこと、即ち、氣取することは眞の上品さではない。作者は、そしてエヴェリーナは之をよく看破してゐることが手紙の中によく現わされてゐる。如何にもたやすい明確なそして自由な会話体の文体には高遠な思想もむづかしい倫理觀も説かれてはいないけれども、ジョンソン博士に云わしめた“Character-monger”(面白い人物をならべ立てる人物凝り屋さん)の名に相応しく種々多様な特徴のある人物が相寄つてなすユーモア劇にたつぷりと道義を説いている。「小説」「Novel」という語が未だお堅い信心家連には怖ろしいものゝようであつた時代、既に出ていた小説は「読みましたか?」と訊かれても、ちやんとしたお嬢さんには「えゝ!」と答えられないようなもの許りというやうな時代だつた。煽情的であるか、センチメンタルであるかといった風に。「エヴェリーナ」は読んでゐる所を見つかつても表紙を隠す必要のないはじめての小説なのであつた。しかも上流社会の生活も又庶民の習俗も楽しめるし、又老人にも若い

者にもおもしろく読める純然たる家庭小説である。

ファニーは妹を充分に楽しませ、自分は書く事それ自体を楽しんだ以外に出版の秘密を可成りよく守つた事、之が段々とばれて行く事、それらも又彼女には大きなスリルであつた。出版の年の八月の日記によると母と共に版元のロウンズ氏の許にわざ／＼一部を買いに行き、著者は誰か知つているかと母に探つて貰つてゐる。ロウンズ氏は知らぬ存ぜぬの一点張りであつたが、問ひつめられてまだ「男か女かも長い間判らなかつたが、免に角その人はその道に通じた人で又時代の風俗にも精通して居られる方といふ事だけは判つてゐるが」と心得たような事を云ひ、遂に『本音を吐けばこの小説は實際にあつた秘密の話ですから、誰にも作者の名前は知らせないようにと私は云はれてゐるんです。』との言葉にファニーは「笑ひを堪えきれなくなつて外つぽを向いて店から出て来た。」と書いてゐる。又ファニーの小説と知らせないで姉のヘテイが病気の従弟に読んで聞かせてゐると聞いて、ばれやしないかとびく／＼者のファニーの姿も日記の中にあり／＼と見えるし、クリスプの父様に朗読してあげる時には「序文の詩はこしらへ事ではなく真情の吐露、the sincere effusion of my heart」なので声が出なかつた。」面白がつて先をと望まれる程であつたが、八月四日に父が老紳士に明すまでは無事にこの秘密は守られていた事も又日記に書いてある。

ファニーの声が聞えたといふエヴェリーナの献呈の詩の他に二つの序文が附されてゐる。詩の方は“O Author of my being!”（われをあらしめし君よ）で始まる四行五連の詩によつて父バー

ニー博士に献呈の詞を連ねてゐる。序文の一つは“Monthly and Critical Reviews”(月刊評論)の著者にと題し、「エヴェリーナ」や日記とは全く違つた男性的な堅い文体で書かれてゐる。確かにジョンソン博士を想起するような均整のとれた文である。更に今一つの読者に与えた序文の方では

“I yet presume not to attempt pursuing the same ground which they have tracked; whence, though they may have cleared the weeds, they have also culled the flowers; and though they have rendered the path plain, they have left it barren.

「小説に於ての先人等がつけた同じ道を私は敢て辿ろうとはしない。先人等はその道に生えた雑草を取除いてくれたかも知れないが、或は花まで摘み取つたかも知れない。道を平坦にしてくれたが、或ひは不毛の土地にしたかも知れない。」

と。又

“Whatever may be the fate of these letters, the writer is satisfied they will meet with justice; and commends them to the press, though hopeless of fame, yet not regardless of censure.”

「この書簡体小説の運命は如何にならうと正当な取扱ひを受けさえすれば作者は満足である。名声をかも知得ようなどとの望みはつゆなく、御非難は心して承るつもり、凡ては論評にお委せする。」

と、却々フランスの取れた云ひまわしや対照的な節 (clause) を含む文章は將にラッセラス (Rasselas) の響を持つてゐる。「エヴェリーナ」やその頃の日記の文体とこの序文に見るようなジョソソ風の文体までの幅の広さは読者に大きな期待を持たせるがフアニーの人気作家としてのスラール夫人の社交界に於ける生活やそれから「エヴェリーナ」の作家なるが故に宮廷に迎えられる事は「character monger」として更に多様な人物を観察した筈でありながら、「エヴェリーナ」につづく作品は「エヴェリーナ」を凌駕しなかつたという事は甚だ淋しい事である。エヴェリーナならずとも内氣過ぎるフアニーは作家扱いされて、作家意識を持つようになると最良の自己を表現する事が出来なかつたかのである。円熟期であるべき時期に宮廷で過した五年間の日記はジョージ三世の発狂の記事やシャーロット王妃の服装の事や一日の日課等の記述等は貴重なものであるが又その間の作家である彼女の傷々しい生活の記録は空想を奪い創作慾も噛み殺して了わねばならないようなものであつた。辛うじて死の一步手前で自分の世界に歸つて来た三十代も終りに近い彼女は、十代の新鮮さや向見ずな氣持は愚か二十代の自信にも熱意にも戻れなかつた。ジョソソ風の文体の幾分か父バーニー博士の追想録に讀み取られるが之もその時代を識るによい資料と云われるだけである。四十代になつてフランスの亡命將軍ダルブレイと結婚して以来はフランスに十年余移り住んだ事もあり、英語と縁が薄くなつたせいか彼女の著作の英語はスポイルされて了い、最後の小説「The Wanderer」はあまり問題にならないようである。而しダルブレイ夫人は家庭小説「エヴェリーナ」の作家として彼女に続き彼女を遙かに凌ぐマリヤ・エッジワース (Maria Edgeworth) の社会小

説やチェーン・オースティンの優秀な客間小説への道を開拓した功績を、否、英国小説の発展の鎖の「こま」を繋ぐ業績を憶えよう。

註

- ① Dr. Charles Burney (1726-1814) オルガニスト及音楽歴史家
- ② Emily Hahn: "A Degree of Prudery" 1951 Publ. by Arthur Baker Ltd.
- ③ Mrs. Schwelienberg. シャーロット王妃に附添つてドイツから渡つて來た衣裳係
- ④ Austin Dobson: "Fanny Burney" p. 28. 「エヴェリーナ」發表の五年前の事
- ⑤ William Hazlitt: "English Novelists"
- ⑥ "Daisy Miller" コメテロ夫人の言葉

参考文献

- Lewis Gibbs (ed.): The Diary of Fanny Burney.
Austin Dobson; Fanny Burney. (Eng. Men of Letters Series.) Macmillan.
Emily Hahn: A Degree of Prudery. Arthur Barker Ltd. London.
Harold Vaughan: Sterne, and the Novel of his Time. The Cambridge Hist. of Eng. Lit. Vol. X.
Albert C. Baugh: A Literary Hist. of Eng. pp. 1032-1034, p. 1070.
Thomas Babington Macaulay: "Madame D'Albany," Critical and Historical Essays, Everyman's Library.
William Hazlitt: On the English Novelists, Hazlitt's Works, Bohn's Libraries.